

## 短期大学における学生生活充実度と学内滞在時間

渡邊, 和明  
精華女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/2740978>

---

出版情報 : 九州大学教育社会学研究集録. 20, pp.1-9, 2020-03-26. Seminar of Sociology of Education, Department of Social and Human Developmental Sciences, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 短期大学における学生生活充実度と学内滞在時間

## A study on Campus Life Fulfillment Degree and Staying Time on Campus in Junior College

渡邊 和明

### 1. 研究の背景

本稿では、短期大学生の学内滞在時間に焦点をあて、学生生活充実度との関連性について実証的に明らかにすることを目的とする。学内滞在時間および学生生活充実度において、それぞれ学業関連、学業関連以外の視点から分析をすすめる。

現在、大学において社会や学生の多様なニーズを適切に把握し、学生支援に係る部署が役割・機能を明確化したうえで、連携し学生を支援していくことが求められている。このことは、大学教育の質保証の観点からも重要な課題となっており、これら学生ニーズの把握の方法として、学生環境調査、授業アンケートなどが実施されてきた。

喜始(2014)は、「特に大学生生活満足度は、多くの大学で学生の大学評価を如実に表す指標の一つとされ、大学生生活満足度のみを手がかりに教育・学生支援の改善には十分注意が必要であるが、教育・学生支援の質保証を考えるための有用な分析素材となっている」との指摘がある。

山田・天野(2003)は、大学生においても、学業に意欲を持てず無気力状態となる、友人ができない、教員ともコミュニケーションがとれない、学内で居場所が見つけれられないなど、学生生活の適応に困難を抱える学生の増加を指摘している。この居場所について、塚田(2017)は、居場所は青年期を過ごす学生にとって重要なものであり、学生が学内に居場所を持つかどうか調べることの意義を述べている。大対(2015)は、学校には、「勉強が面白いから、学校が楽しい」という子もいれば、「勉強は苦手だが、気の合う仲間がいるから学校が楽しい」という子もおり、何が「学校の楽しさ」につながる要因かは重要な分析視点としている。

また、学生生活に関して武内(2003)は、どのようなキャンパスライフ(学生生活)を送っているか正確に知り対策をとることが必要であり、実際のキャンパスライフに関するデータの中から、大学教育、学生支援の方策を考えていくことの重要性を指摘している。そこで、短期大学生における学生生活全体の活動時間の特徴についても明らかにする。

これまで、これらの課題について4年制大学を中心に研究がなされ、短期大学に関する調査・分析はいまだ数少ない現状にある。そこで、本稿では、短期大学生の学内滞在時間

に焦点をあて、学生生活充実度との関連性について実証的に明らかにするとともに、短大生活の活動内容・時間配分の特徴についても考察をすすめる。

## 2. 先行研究の検討

吉本・稲永(2000)は、大学全体の学生評価は授業などフォーマルな側面への満足度によって左右され、「サークルや友達との交遊」といったインフォーマルな側面は、九州大学においてはさほど重視されていない点を明らかにしている。

大対(2015)は、私立K大学1年、2年生を対象に大学生生活充実度を規定する要因について調査分析し、特に「交友満足度」の要因が大学生生活充実感に最もとよく影響され、「学業満足」については、大学生生活充実感を規定する要因ではないという結果を明らかにしている。いわゆる研究大学では、学業に関する満足度が学生評価に影響を及ぼし、4年制私立大学の大学生生活充実感では、学業よりも交遊満足度に影響される結果となっている。短期大学においては、4年制私立大学に近い傾向が想定されるが、実際にどのような特徴を示すのか考察していく。

学内滞在時間に関して、基礎資料として全国大学生生活協同組合連合会(2019)『CAMPUS LIFE DATA2018』の調査によると、1日の授業コマ数や学内滞在時間を見ても前年から減少しており、生活時間が学外での時間へと移行する傾向がみられ、さらに学内滞在時間では、大学生活の重点が「勉強や研究」の学生は8.0時間と長く、「趣味」の学生は6.6時間と短い傾向にあることが分かっている。

塚田(2017)は居場所には他者との関わりが付随するものであることから、学生の友人関係やコミュニケーション特性と居場所との間の関連性について調査分析し、結果、友人関係が上手くいっていない学生は、学内に居場所がないと認識し、授業についていくことが精いっぱいであるサークル等を行う余裕がないことを明らかにしている。しかし、学内に滞在している理由が学業関連なのか、友人との交流やサークル活動なのかという視点は含んでいない。

浜島(2014)は、大学の滞在時間と学生生活充実度との関連性について経年分析(1996、2001、2006、2011)を行なっている。その中で、「大学生活に充実している学生は、学内での人間(交友)関係を中心とした活動拠点を築いており、大学から外に出なくとも困らないとし、学年が上がるごとに学内環境を知り、学内に居場所をみつけ居心地の良い時間を過ごせる」と述べている。分析結果では、充実している学生は、充実していない学生と比較して、どの調査年度においても滞在時間が長いことが分かっている。さらに、授業コマ数が少ない学生ほど、授業以外の活動で学内に滞在していることも明らかとなっている。しかし、学内滞在時間の活動内容に関しては分析の範疇に含まれていない。

短大生の授業以外の学内滞在では、レポート等の課題の取り組み、友人との交流、サークル・部活動が中心となっている。そこで、先行研究の研究枠組みを援用しながら、学生

生活充実度、学内滞在時間について、さらに学業関連と学業以外（友人との交流、サークル・部活動）に分類し分析をすすめる。

本稿では、学内滞在時間(学業関連と学業以外)に注目し、学生生活の充実度(学業関連と学業以外)について検討していくが、学業関連滞在時間が長い学生が学業関連充実度も高く、同じく学業以外の滞在時間が長いことが学業以外の充実度が高い結果が予測され、短期大学において学内の滞在時間が長いことが結果的に短大生活の充実度が高いとの仮説のもと分析・考察を進める。

### 3. 調査概要と学内滞在時間によるタイプ分類

#### (1) 調査概要

本調査は、福岡県内 A 短期大学の学生 556 名へのアンケートを実施した結果である。短期大学の特徴的分野である幼児保育分野(1 年生 143 名、2 年生 119 名)、食物栄養分野(1 年生 96 名、2 年生 87 名)、ビジネス系分野(1 年生 56 名、2 年生 55 名)を対象とした(有効回答率:82.0%)。

学校基本調査(平成 29 年 3 月)において、短期大学の職業別内訳就職者数を確認すると、幼稚園教員 4、843 名が最も多く、次いで栄養士 3、476 名となっており、短期大学教育の代表的分野となっている。本稿では、幼稚園教員・保育士の養成課程である幼児保育分野、栄養士の養成課程である食物栄養分野を分析対象とする。

吉本(2012)によると、「短期大学において地域総合学科のような「キャリア探索」型の取組が拡大しており、今後、総合的効果について研究・検討の必要性」が指摘されている。今回の調査対象であるビジネス系分野の学生の多くが国家資格分野とは異なり、今後の職業選択を中心としたキャリア形成について模索段階にあり、キャリア探索型の特徴的学科・専攻となっている。したがって、本稿では短期大学における代表的な 3 学科・専攻について統合的に分析をすすめることとする。

なお、調査方法は、平成 28 年 7 月に学科・専攻ごとにアンケート質問紙により入力回答を得たものである。調査にあたっては、すべての学科・専攻において調査の目的、回答方法等について説明をおこなったうえで実施した。

質問項目は、①正規カリキュラムである教養科目別・専門科目別および課外・学外活動における獲得能力、②短期大学での知識・能力の変化、③生活・仕事に対する価値観、④学生生活に関して、設定した。なお、本稿にて分析に使用する質問項目は、④学生生活に関する回答結果である。

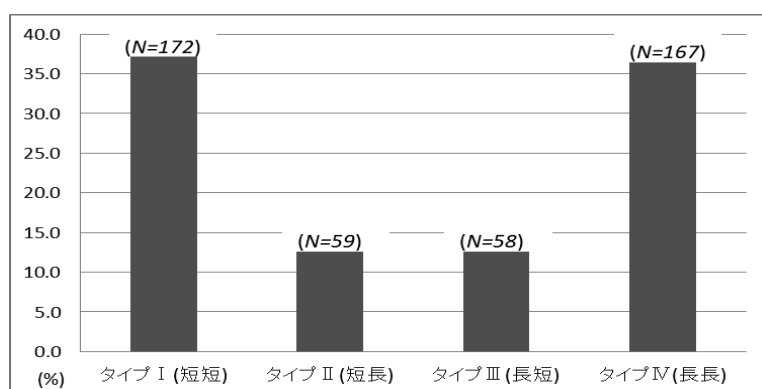
#### (2) 学内滞在時間によるタイプ分類

講義が実施されている期間の 1 週間合計での学内滞在時間について質問をした。その中

で、学業関連の学内滞在時間(授業は含まない)と学業以外(友人との交流、サークル・部活動)の学内滞在時間に分けて回答を得た。この学業関連の滞在時間と学業以外の滞在時間について、度数分布を参照し中央値を分割基準として、それぞれ2つのグループに分割した。中央値は、学業関連滞在時間 20.00 時間、学業以外滞在時間 2.05 時間であった。

結果、学業関連滞在時間が長いグループが 50.3% (平均値:44.97 時間)、短いグループ 9.7% (平均値:6.44 時間)、学業以外の滞在時間が長いグループが 50.0% (平均値:8.16 時間)、短いグループ 50.0% (平均値:0.98 時間) となり、これらを組み合わせ4つのタイプに分類した分布が図1である。タイプI(学業関連-短、学業以外-短)36.6%、タイプII(学業関連-短、学業以外-長)12.9%、タイプIII(学業関連-長、学業以外-短)12.7%、タイプIV(学業関連-長、学業以外-長)37.7%となり、本稿では4分類により分析をすすめることとする。

図1 学内滞在時間の4タイプ



#### 4. 分析の結果

##### (1) 短期大学における学生生活の特徴

まずは、学内滞在時間の異なる4つのタイプが短大の学生生活全体において、実際にどのような活動に時間をあてているのかを合わせて視野に入れておく必要があり、その特徴を確認しておく。講義が実施されている期間の1週間合計で、以下の各項目に費やした時間について質問をしている。質問項目は、①授業以外の学習時間、②友人との交流、③運動やスポーツ、④ボランティア活動、⑤家事手伝い、⑥アルバイト、⑦サークル・部活動、⑧テレビ鑑賞、⑨携帯電話の使用、⑩読書、⑪通学時間の11項目である。ただし、活動時間については、学内の活動なのか、学外での活動なのか、分類した質問ではなく学生生活全体での活動時間であることに留意する必要がある。回答の時間数については、15分刻みにて記入してもらった。質問の11項目のタイプ別の平均値・標準偏差を示したデータが表1である。

表 1 タイプ別の学生生活活動内容

	授業以外の 学習時間	友人との交 流	運動やス ポーツ	ボランテ ィア活動	家事手伝い	アルバイト	サークル・ 部活動	テレビ鑑賞	携帯電話の 使用	読書	通学時間	合計	
タイプⅠ(短短)	平均値	1.66	9.83	0.80	0.21	2.11	6.50	0.66	6.18	13.38	0.54	3.85	45.73
	%	3.6%	21.5%	1.8%	0.5%	4.6%	14.2%	1.4%	13.5%	29.3%	1.2%	8.4%	100.0%
	標準偏差	3.463	17.813	1.605	0.666	3.635	8.708	2.619	10.466	20.902	1.399	8.751	
	度数	169	166	163	155	162	156	149	166	166	165	168	
タイプⅡ(短長)	平均値	2.06	12.19	1.36	0.06	2.53	9.13	0.64	10.09	18.80	0.41	5.64	62.92
	%	3.3%	19.4%	2.2%	0.1%	4.0%	14.5%	1.0%	16.0%	29.9%	0.6%	9.0%	100.0%
	標準偏差	2.211	19.586	4.103	0.201	3.848	9.851	1.430	11.119	19.183	0.626	7.471	
	度数	58	57	56	53	56	56	51	59	55	57	59	
タイプⅢ(長短)	平均値	2.15	9.63	0.98	0.01	2.34	9.79	0.32	8.78	21.29	0.46	4.52	60.27
	%	3.6%	16.0%	1.6%	0.0%	3.9%	16.2%	0.5%	14.6%	35.3%	0.8%	7.5%	100.0%
	標準偏差	2.879	11.478	1.589	0.049	7.092	9.986	0.810	10.000	21.293	1.050	5.074	
	度数	58	54	53	52	50	53	47	54	55	53	56	
タイプⅣ(長長)	平均値	2.77	12.31	1.59	0.12	3.48	9.37	0.52	9.63	23.25	0.86	6.89	70.80
	%	3.9%	17.4%	2.2%	0.2%	4.9%	13.2%	0.7%	13.6%	32.8%	1.2%	9.7%	100.0%
	標準偏差	4.386	14.854	4.486	0.878	5.291	10.472	0.995	11.150	24.393	3.046	11.090	
	度数	166	164	163	152	160	160	154	166	161	161	165	

タイプⅠは、上述の学生生活 11 項目のうち、①授業以外の学習時間、③運動やスポーツ、⑤家事手伝い、⑥アルバイト、⑧テレビ鑑賞、⑨携帯電話の使用、⑪通学時間の 7 項目において他のタイプと比較して最も短い結果であった。全体の時間数からみると短いものの④ボランティア活動、⑦サークル・部活動は、最も多くの時間を費やしている。学内滞在時間が短いことから、学外でのアルバイト時間を確認すると、特にアルバイトに勤しんでいることもなく、4 タイプで最も短い時間となっている。

タイプⅡは、②友人との交流、③運動やスポーツ、⑤家事手伝い、⑥アルバイト、⑦サークル・部活動、⑪通学時間において、ある程度長い時間をあて、⑧テレビ鑑賞は 4 タイプで最も長い時間を費やし、⑩読書の時間は最も少ない結果となった。

タイプⅢは、②友人との交流、④ボランティア活動、⑦サークル・部活動において、4 タイプにおいて最も短い活動時間となっている。アルバイトに関しては、最も時間を費やしている結果となった。レポート課題など学業に関して比較的長い時間学内に残り、学業以外の友人等の交流での学内滞在時間は短く、その後は、アルバイトに勤しむタイプと考えられる。

タイプⅣは、今回の学生生活 11 項目のうち、①授業以外の学習時間、②友人との交流、③運動やスポーツ、⑤家事手伝い、⑨携帯電話の使用、⑩読書、⑪通学時間の 7 項目において他のタイプと比較して最も多くの時間を費やしており、⑥アルバイトも比較的長い時間をあてている。短大は、国家資格も 2 年間のカリキュラムの中で取得し、体育祭など行事も多く、多忙な学生生活であり、短大の特徴的なタイプの学生といえる。

ここまで、学内滞在時間 4 タイプの学生生活の特徴について考察したが、以下、学生生活充実度との関係性について分析をすすめる。

## (2) タイプと学生生活充実度

学内滞在時間と学生生活充実度を検討する上で、学業関連の滞在時間が長い場合、学業関連の充実度が高い学生のみならず、充実度の低い学生もあり得るのか。同じく、友人との交流やサークル・部活動での学内滞在時間が長い学生において、学業以外の充実度が高い学生ばかりではない可能性もあり得る。そこで、学内滞在時間および学業・学業以外の違いによって、充実度の平均得点に差があるかを検討するために、独立変数を学内滞在時間4タイプと学生生活（学業関連、学業以外の2項目）、従属変数を学生生活充実度の得点とする2要因の分散分析を行なった。

学生生活充実度は、「学業に関して」、「学業以外に関して(友人との交流、サークル・部活動)」の項目について、「1. 充実していない」、「2. あまり充実していない」、「3. どちらでもない」、「4. やや充実している」、「5. とても充実している」の5件法にて回答を得た。

結果、交互作用( $F(3, 450)=3.804, p<.01$ )が有意であった。タイプⅠ、タイプⅡ、タイプⅢにおいては、学業以外の学生生活充実度が高い値を示し、逆にタイプⅣでは学業関連充実度において高い値を示した。

表2 学生生活充実度の2要因分散分析

タイプ	学生生活			主効果		主効果	
	学業関連	学業以外	交互作用	学生生活	多重比較	タイプ	多重比較
タイプⅠ(短,短) N=170	3.43	3.59	3.804**	5.78*	学業<学業以外	n.s.	—
標準偏差	1.059	1.096					
タイプⅡ(短,長) N=59	3.46	3.86		12.23**	学業<学業以外		
標準偏差	0.916	0.973					
タイプⅢ(長,短) N=58	3.53	3.41		1.06	—		
標準偏差	0.995	1.155					
タイプⅣ(長,長) N=167	3.44	3.69		13.23**	学業<学業以外		
標準偏差	0.954	1.011					

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

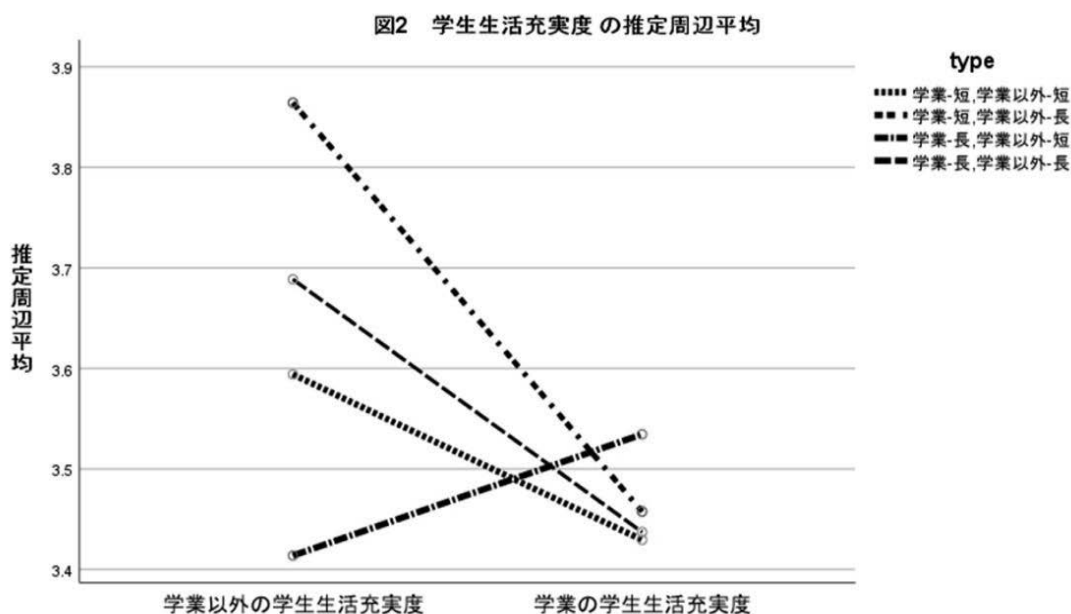
その後、単純主効果の検定を行なった結果、学生生活充実度( $F(1, 450)=13.414, p<.01$ )において有意であり、学内滞在時間のタイプでは有意は認められなかった。そこで、学生生活充実度について、ボンフェローニ法の多重比較を実施した。タイプⅠ( $F(1, 450)=5.78, p<.05$ )、タイプⅡ( $F(1, 450)=12.23, p<.01$ )、タイプⅣ( $F(1, 450)=13.23, p<.01$ )において、ともに学業以外の充実度が学業充実度より高いことが明らかとなった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、短期大学生の学内滞在時間に焦点をあて、4つのタイプ分類を提示し、学生生活充実度との関連性について検討したが、タイプⅣのように学業関連の学内滞在時間が長く、友人との交流、サークル・部活動における学業以外の学内滞在時間も長いタイプ

が、学業関連の充実度、学業以外の学生生活充実度において最も高い値を示すものではなかった。

結果、学内滞在時間(4タイプ)、学生生活充実度(学業関連・学業以外)の交互作用が有意であった(図2)。タイプⅠ(授業関連-短、授業以外-短)、タイプⅡ(授業関連-短、授業以外-長)、タイプⅣ(授業関連-長、授業以外-長)では、学業関連の充実度が低く、学業以外の学生生活の充実度が高い値を示した。これに対し、タイプⅢ(授業関連-長、授業以外-短)のみが、逆に学業関連の充実度が高く、学業以外の学生生活の充実度が低い値となった。



タイプⅢは、学業関連の学内滞在時間が長く、友人との交流、サークル・部活動における学業以外の学内滞在時間が短いタイプで、学内で課題やレポート等を仕上げ、その後はアルバイトに向かっていると考えられる。学業以外の学生生活充実度に関して、平均値をみると4タイプで最も低く、学業とアルバイトに追われている様子がうかがえる。しかし、忙しい学生生活の中で、学業に対して充実度を感じている学生である。

学生生活充実度では、単純主効果が有意であり、多重比較の結果、タイプⅠ、タイプⅡ、タイプⅢが、学業関連の充実度よりも学業以外の学生生活が充実している結果であった。学業以外の学生生活充実度の平均値が高い傾向を示したのは、タイプⅡ、タイプⅣで学業以外の活動で学校に残っているタイプであった。

また、学業関連の学生生活充実度の平均値が最も高かったのは、タイプⅢで、学業関連の学内滞在時間が長く、学業以外の学内滞在時間が短いタイプであった。しかし、次いで学業関連の学生生活充実度の平均値が高かったのは、タイプⅡで学業関連の学内滞在時間が短いタイプであった。葛城(2013)は、学習時間が少ない授業ほど、授業の到達目標が達



成されるという関係性を指摘し、授業外学習時間が教育成果に結びつかない点を問題視している。大学以外の環境(家庭等)において授業外学習時間を多く費やしていると考えづらく、タイプⅡのように授業外学習時間の確保が少なくとも、学業の充実度が高い学生が一定数いることがうかがえる。単位制度において、授業外の学習時間も含まれた学びであり、当然、授業だけで科目の学びが完結するものでもなく短大教育において重要な課題であり、さらなる考察が必要である。

近年、大学において施設など学生のための学内環境整備がすすめられている。具体的には、授業外の学習の場の提供・改善、学生の憩いの場の提供なども行われている。これらは、受験者、入学者の増加も目的のひとつであるが、学内の学びや学生生活においてより良い環境を整えることが重要な目的である。居心地の良い空間を提供し学内に滞在できる時間を増やす方向であるが、今回の結果から、滞在時間を伸ばすという観点からは機能していない点もうかがえ、環境整備以外の方法について検討の必要性が指摘される。

本稿では、学内滞在時間に焦点をあて、学業関連学内滞在時間と学業以外の学内滞在時間に分類し分析をすすめたが、さらに学内滞在時間の具体的な活動に関し調査・分析をすすめることが課題である。また、今回はA短期大学のアンケート結果をもとに分析をすすめたが、他の短期大学への調査・分析の拡充も合わせて今後の課題としたい。

#### 〈参考文献〉

- 大対可奈子, 2015, 「大学生生活充実感を規定する要因の検討」『近畿大学総合社会学部紀要』第4巻第1号, pp. 47-57.
- 喜始照宜, 2014, 「美術系大学における学生の大学生生活満足度の規定要因—学生を対象として質問紙調査をもとに一」『大学教育学会誌』第36巻第2号, pp. 86-95.
- 木村拓也, 2012, 「大学満足度の学年変化とその規定要因の探索—項目反応理論とInterruptive Structural Modelingを用いた分析」International Society for Education(国際教育学会)編『クオリティ・エデュケーション』4号, pp. 73-92.
- 葛城浩一, 2013, 「学習時間の確保は教育成果の獲得にどのような影響を与えるか—授業外学修時間と教育成果の獲得との関連性に着目して—」『大学教育学会誌』第35巻第2号, pp. 104-111.
- 佐藤弘毅編, 2011, 『短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究』先導的・大学改革推進委託事業.
- 全国大学生生活協同組合連合会, 2019, 『CAMPUS LIFE DATA2018』学生生活実態調査報告書.
- 武内清, 2003, 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部.
- 武内清, 2010, 『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』平成19~21年度文部科学省研究補助金(基盤研究B)研究成果・最終報告書.
- 塚田知香, 2017, 「大学生の学内での居場所に関する探索的検討—新校舎設立前後における

- 比較～」『経営論集』第5号, pp. 1-9.
- 浜島幸司, 2014, 「大学生の大学滞在時間:4時点(1996年・2001年・2006年・2011年)の比較から」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』Vol. 4, pp. 99-113.
- 溝上慎一, 2008, 「授業・授業外学習による学習タイプと能力や知識の変化・大学教育満足度との関連性-単位制度の実質化を見据えて」山田礼子編著『転換期の高等教育における学生の教育評価』東信堂.
- 山田ゆかり・天野寛, 2003, 「大学におけるストレスとコーピング」『名古屋文理大学紀要』第3号, pp. 1-11.
- 吉本圭一, 2012, 「短期大学におけるキャリア探索と地域総合学科の挑戦-2009年短期大学1年次学生調査の結果より-」『短期高等教育研究』Vol. 2, 短期大学コンソーシアム九州, pp. 39-46.
- 吉本圭一・稲永由紀, 2000, 「学生の授業満足度と大学教育の効果に関する一考察-九州大学10学部学生調査データ比較-」九州大学大学教育研究センター『大学教育』6, pp. 1-23.
- 渡邊和明, 2018, 「短期大学生の獲得能力に関する一考察-正規カリキュラムと正課外活動を視点として-」『短期高等教育研究』Vol. 8, 短期大学コンソーシアム九州紀要, pp. 13-20.